専念寺通信

１０月号（ＮＯ．１４６）
http://sennenji.s296.xrea.com/

１０月に入り、ようやく秋めいてきました。お彼岸のあいだには咲かなかった彼岸花が、１０月３日ころにやっと咲きました。そして、同じころに今年はじめての銀杏の実が落ちました。
みなさま、お変わりなくお過ごしですか？

☆秋の彼岸

今年の秋の彼岸は、例年よりもっときびしい気候になってしまいました。前半は３３度の暑さ、そして、雷や大雨、最後のころはコートが欲しいような肌寒さ、まったく、「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉をしみじみと実感した１週間でした。全部で１８２軒の壇家さまが、このきびしいお天気の中、お墓参りにいらしてくださいました。ことしは、昨年にもまして、世代交代の感じられるお彼岸でした。若い方たちがきびきびとご挨拶され、頼もしく、また、脚の具合の良くない親御さんを車で送って来られたり、とごく自然に若い皆さんがふるまわれていることに感銘を受けました。東日本大震災の影響で、お仕事がうまく進まなくなった方のお話も複数うかがいました。あの震災は現地にいた人だけでなく、私たちの国全体のとても大きな問題なのだと、再認識させられました。震災の募金箱に、義損金を入れてくださる方も多く、私たちにできることは少しずつでも必ず実行しようと改めて強く思ったことでした。また、病気をかかえながら、必ずお墓参りにいらっしゃる方もかなりいらして、きっと、ご両親や大切な方と会話することで、また、生きるちからを得て帰られるのだろうと感じました。亡くなった方はたしかに近くにいて、私たちの言葉に耳を傾け、目に見えないちからで私たち生きているものを支えてくれると私も信じています。信仰とは、この形でなければならない、とか、この祈り方でなければならないとか、そのような、人が後智慧でつけたことをすべて超越したところにあるものだと思います。「南無阿弥陀仏」は、私を阿弥陀仏（無限の命と無限の光）にゆだねます、という意味です。自分自身を、ある瞬間に人間を越えたものにゆだねるのだ、という気持ちが重要だという、宗教の持つ根源的なことが法然上人の祈りの言葉にあらわれています。驕ることなく、けれど自分がいまできることはためらうことなく行なう、そんな風に生きられればよいのでは、と。

写真は、墓地の奥で晩夏にひっそりと花を咲かせる玉スダレ、初めてぽとりと落ちたギンナン、洗っておひさまに当たっているギンナン、それから、１０月になって「ちょっと遅れましたけれど・・・」と言いながら咲いた彼岸花です。檀家さまが下さった白い彼岸花も２輪、ちゃんと開きました。ギンナンは毎日拾って、少しずつ洗って、来年のお正月に皆さまに差し上げられるように準備します。楽しみです。朝晩、寒くなって参ります。皆さまどうぞご自愛ください。

平成２４年１０月１日　大黒